

南 極 の 正 月

小 口 高 (地球物理研究施設)

書き出しから妙な話になるが、昭和基地の住人は人間だけではなく小さなダニがいる。このダニは日本から運んで行ったものではないかと疑う人もいるようであるがその道の専門家の話ではまぎれもなく昭和基地の先住者だそうである。何故それがわかるのかというと、外気温に対する活動度の依存性を調べてみると南極原産のダニは、温度は 10°C 位で最も活発に動きまわり、20°C に達すると動きは急激に鈍くなるが、日本産のダニは 20°~30°C 位で最も活発に動きまわるということである。もちろんいかに南極原産のダニでも気温が 0°C 以下に下れば冬眠状態になることはいうまでもない。

そこで昭和基地で気温が 0°C 以上になる日を調べてみると正月をはきんで 12 月と 1 月の間にたった 20 日位しかないことが知られる。つまりこのダニは 1 年 365 日のうちたった 20 日を目を覚まして餌を探し、残る 345 日を眠って暮していることになる。

海の中でも似たようなものらしい。昭和基地の正月に

は輸送の合い間、天気が悪くてヘリコプターが飛べない日には魚釣りが流行する。厚さ 2 m 程の氷に穴をあけて釣り糸を垂れると忽ち喰いつい上ってくるのが、オングルダボハゼと通称される口の大きい魚である。味は淡白でなかなか美味だが、この魚を釣るには実は餌は何でもよい。われわれも始めは肉の切れ端などをつけていたが、べにしょうがでもよいし何もつけずに針だけでもよいことはすぐわかる。何かが上から落ちて行くと何でもかまわず喰いつくらしい。恐らくそれは、海面近くから落ちて行く沖アミなどを常食としているので、落ちて行くものには何でも飛びつく習性ができているのであろう。

さらに面白いのはこの魚は一つの穴ではある数を限度として後はバツリ釣れなくなり、ほんの 2~3 m 離して別の所に穴をあけるとまた何匹かがつれるということである。一つの穴でつれる数は冬は少なく、正月頃になると急に増えるようである。つまりこの魚は底魚で余り

泳ぎまわることがなく、何か落ちて行くと、それが見える範囲にいるのが喰いついて釣り上げられ、その外にいるものは全く知らん顔だということであり、正月頃になればダニと同じようにいくばくか行動範囲が広がることを示している。これはまた、その程度しか動きまわらなくても十分餌にありついているということもある。この頃のように無闇に忙がしい人間の世の中から見れば何とも羨ましい優雅な生き方であるように思われる。

所で南極の人間の方は、どうかといえこれもある意味ではよく似ているといえなくもない。正月が休みになるのんびりできるのは日本での話であって南極では一年中で一番忙しい交替と輸送の時期に当るからである。短かい交替の期間には数百トンの荷物の輸送と建物の建設や機械の入れかえなど目の回るような有様になり、陽が一日中沈まないことも手伝って、眠る間もない労働の季節となる。顔はサングラスの跡を白く残して雪やけし、めがね痕のような形相になり、きたならしい作業衣で砂ぼこりにまみれて働いている姿はそれだけでもおよそ正月とは縁の遠い眺めである。

正月らしさというものは暦の上の区切りに伴ってともかくも生活に何かの区切りをつけ、あるいは区切りをつけたような気になって暫くの休養をとり、何とはなし新しい気分で仕事にとりかかる一つの休止期間だといえ

るだろう。東京では正月三日にはスモッグもなくなり、富士山がきれいに眺められるということになる。寒さ、雪、ストーブ、年賀状、雑煮、みかん、新年会などがそれに色を添える。なる程交替のヘリコプター第一便では新鮮なオレンジや、野菜、家族や友人からの便りをお年玉として届けてくれるし、また輸送の最中に天候が悪くなり輸送の休止期間もあるが、オレンジにみかんを思い、手紙の束に年賀状を思うことは余りない。休みはただの休みであって全体は活動の季節であり、活動は連続で、気分の上でも実際面でも全く区別がないからであり、一日中沈まない太陽だの、一年中で一番気温の高いことなどがますます正月らしくない方の気分を拍車をかける。

今頃は新しい人達と越冬を済ませた人達が共同の輸送や建設に従事している頃である。相も変わらず、目を覚したダニや魚と一緒に真夏の営みに真黒になって働いているに違いない。正月の終りには一年を何日かで暮すダニ達は眠りに這入り、魚達も動きが鈍くなり、人間はといえば、越冬した仲間は基地を去り、新しく行った仲間は冬ごもりの仕度にかかる。人間を含めて南極で暮す生き物にとっては六月末の南半球の冬至の日の方がずっと正月の気分に近い。気分を新たにするにはやはりある種の自然の区切りが必要なようである。